児童福祉施設におけるライフストーリーワーク

－日本版モデルブックを用いた試み－

○　大阪市立阿武山学園　徳永　祥子（6671）

才村　眞理（帝塚山大学・3762）

キーワード：ライフストーリーワーク　子どもの権利　アイデンティティ

１．研 究 目 的

15年前に日本が批准した『子どもの権利条約』は、子どもの「知る権利」や「参加する権利」を保障している。わが国では、児童福祉施設や里親などの社会的養護のもとで暮らす子どもが３万人以上いるが、施設入所理由の説明や子どもが置かれている環境に関する告知は充分なされているだろうか。一般家庭で暮らす子どもに比べると、児童福祉施設で生活する子どもが生活の中で自然に自らの生い立ちや家族史に触れる機会は少ないことが予想される。長期間に渡ってこのような状態を放置することは、子どもがアイデンティティを構築していく過程で障壁になりうる。さらに問題なのは、「何を伝え、何を伝えないのか」という支援者側の意思決定は、おのおのの価値観や経験及び能力に大きく左右されているという現状があり、担当者の質の差が子どもの権利保障の差に直結するという不公平な状況が生じていることである。

これまで述べた現状を改善するために、発表者らの所属する研究会では、ライフストーリーワークというツールを用いることを企図した。その理由の一つは、ライフストーリーワークは子どもの権利を保障するという観点が含まれているからであり、もう一つは、ライフストーリーワークを行う過程そのものが子どものアイデンティティの構築を支援する効果が予想されるからである。

そこで、われわれは、英国のライフストーリーブックの日本版モデルブック（以下、ブックと記す）を作成し、モデル実施した結果をもとに、我が国の実践においてこのブックがどのようなメリットやデメリットをもたらすかを明らかにする。その上で、ブックを実施する際に支援者が感じる葛藤や迷い、障壁などに着目しながら、ライフストーリーワークをより広範囲かつ普遍的な実践として展開していくための方策を研究する。

２．研究の視点および方法

本研究は、関西地区の実践者と研究者から成るライフストーリー研究会によって行われた。英国 BAAF（British Association of Adaption and Fostering）刊行のライフストーリーブック‘My Life and Me’及び手引きを参考にブック及び手引きを200部作成し、2008年度は８事例についてモデル実施した。実施対象は男５名、女３名、実施者は児童福祉司３事例、児童心理司１事例、児童自立支援専門員３事例、施設心理士１事例であった。また同時に、実施にあたっては、‘Life Story Work’（Ryan,T and Walker, R. 2007）の日本語訳に取り組み、実践方法やリスクについても事前に学習した。

実施後は研究会メンバーが実施者へ個別にインタビュー調査を行った。項目は、①実施

内容について、②モデルブックがあることのメリットとデメリットについて、③子どもにとっての効果とリスク、④実施者側の課題と評価、⑤今後の課題、の5点である。

本発表では、支援者が子どもの感情を扱う際や新たな事実を伝える際に葛藤や不安を感じたという点に着目し、その過程でブックがどのような意味をなしたのか分析する。同時に、ブックを使用せずにワークを行った際の経験を踏まえ、ブックのメリットとデメリットを整理する。

３．倫理的配慮

本研究においてブックを試行した対象児童の中には、現在も児童福祉施設で暮らしている者も含まれることから、発表に際しては匿名性に配慮し、個人が特定されないようにした。また、ライフストーリーワークを実施することで子どもと支援者に心理的負担がかかることが想定されたため、児童相談所と生活担当者の相談体制や研究会でのケース検討などのバックアップ体制を作り、実施した。

４．研 究 結 果

主なメリットは、ブックが一定の「枠組み」を提供している点であることが分かった。具体的には、①ワークの内容が可視化されるため当事者や関係機関の理解や協力を得やすい、②内容や流れをある程度予測できるので支援者側が危険を回避する形でプラニングすることが可能、③否定的もしくは肯定的な面だけに偏らず、一定の範囲内で子どもの話を「聴き」「受け止める」ことができる、④聞きにくいと感じる内容であっても、「ブックが聞いてくれる」ことから支援者の感情や力量に左右されにくい、⑤ライフストーリーワークとそれ以外の時間の区別がしやすくなる、などであった。

これらは、①ライフストーリーワークの認知度が高くない、②子ども対する情報提供や真実告知に対する統一の価値観が形成されていない、③退行あるいは行動化の可能性が想定される支援は関係者の理解が得にくい、といった我が国の現状と照らし合わせて考えると、ブックの「枠組み」がもたらすメリットは大きいといえるのではないだろうか。

デメリットとしては、①項目が詳細で多すぎる、②子どもによっては扱えない項目や不適切な内容が含まれている、③絵など文章以外の表現方法の方が取り組みやすい子どももいる、などの点が指摘された。今後、改良していく課題が残されたといえる。

全体を通じて明らかになったことは、ライフストーリーワークの根底にある価値や倫理に精通しておくことが実施にあたっての必要不可欠な条件であるという点である。その上で、支援者の葛藤や不安を軽減するためには、継続的なトレーニングやバックアップ体制の整備等に取り組む必要があることが明らかになった。

なお、この研究は、明治安田こころの健康財団「社会的養護にある子どものへのライフストーリーワーク―施設入所している子どもの自叙伝づくりをサポートする方法―」(研究代表者は帝塚山大学・才村眞理）の研究成果の一部である。